

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530654

研究課題名(和文) アフリカ系アメリカ人の愛国心の特徴とその形成要因

研究課題名(英文) African Americans' Patriotism and Its Determinants

研究代表者

石生 義人 (ISHIO, Yoshito)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：60282331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アフリカ系アメリカ人男女の愛国心の特徴とその社会的形成要因を明らかにするため、テキサス州に在住する対象者27名をインタビューし、彼ら(彼女ら)の愛国心を質的に調査した。その結果、対象者の22名が比較的強い愛国心を抱き、5名が比較的弱い愛国心を抱いていた。これら5名のほとんどが、愛国心が弱い理由をアメリカ合衆国の人種差別問題と関連づけていた。愛国心が強い対象者もほとんどが何らかの差別を体験していたが、愛国心があまり弱くならないようであった。本報告書の本文では、その理由をいくつか説明している。

研究成果の概要(英文)：In order to examine how churches and other social factors affect the patriotism of African Americans, I have conducted qualitative research employing an in-depth interview method. Research participants are African American Christians in Texas who are at least 30 years old and have at least a four-year university degree. Because the data collection is currently continuing with a goal of reaching roughly 50 participants, this is an interim report on the data collection up to March 31, 2015. I completed interviews with 27 participants (10 men and 17 women) as of March 31. A majority appear to have a strong love for America, while a minority have relatively weak love for America. The characteristics of their patriotism and the effects of social factors are explored. The data collection will end in August, 2015.

研究分野：社会学

キーワード：愛国心 アメリカ合衆国 テキサス州 キリスト教 アフリカ系アメリカ人

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究において、愛国心は「自国に対する深い愛着の情」と定義され(石生 2011:9)、アメリカは、アメリカ合衆国のことを指している。筆者は全米サーベイ調査データを使ってアメリカ人の愛国心を計量的に分析し、「Social Bases of American Patriotism」というタイトルの論文を 2010 年に発表していた。この論文では、人種・エスニシティと愛国心の関係を分析し、白人の愛国心が比較的強く、アフリカ系アメリカ人の愛国心が比較的弱いことを統計的に示した。また、白人の中でも、経済階層が高い者、キリスト教徒(特にバプテスト派)の愛国心が強いことを示した。

(2) 筆者は、2006 年 9 月～2007 年 7 月までアメリカ合衆国テキサス州中部において、地域の白人キリスト教徒 46 名をインタビューし、その質的データに基づいて、『アメリカ人と愛国心：白人キリスト教徒の愛国心形成に関する社会学的研究』(2011)という研究書を出版した。この質的研究の成果から次の三点が明らかになっていた。第一に、白人キリスト教徒が愛国心を持つ理由として、アメリカに存在する「自由」が最も言及され、特に信教の自由が保障されていることに感謝の気持ちを抱き、強い愛国心につながっていた。第二に、愛国的社会化の担い手は、学校や教会などであった。第三に、2001 年の同時多発テロ事件勃発直後に愛国心が高揚していた。

(3) 以上の計量的および質的研究成果から、白人アメリカ人の愛国心の特徴が明らかになっていた。しかし、これらの知見が、アメリカのマイノリティの人々に当てはまるのかどうか強く疑問を抱き、アフリカ系アメリカ人の愛国心を理解する必要があると考えた。現状においても白人との格差(収入・教育達成・職業・健康等)が指摘され(Shelton and Emerson 2012:204)、多くが被差別体験を持つアフリカ系アメリカ人は、アメリカ社会をどのように評価し、その結果どのような愛国心を持つに至っているのか。アフリカ系アメリカ人もキリスト教徒が多いため、教会の影響が存在すると考えた。また、アフリカ系で初めての米国大統領が 2009 年に誕生したことは、アメリカ社会に対する彼ら(彼女ら)の評価を変化させたであろうと推測した。したがって、現在の彼らの愛国心を研究する必要があった。

## 2. 研究の目的

本研究は、アメリカ合衆国における実地調査を通して、アフリカ系アメリカ人男女の愛国心の特徴とその社会的形成要因を明らかにすることを目的としていた。本研究は、5 つのリサーチクエスチョンを設定した。アフリカ系アメリカ人から見たアメリカ社会

はどのような社会なのか。被差別体験は、彼らの愛国心にどのような影響を与えているのか。キリスト教信仰および所属教会は、彼らの愛国心にどのような影響を与えているのか。9.11 事件やイラク戦争は、彼らの愛国心にどのような影響を与えたのか。

オバマ大統領の就任は、彼らの愛国心にどのような影響を与えたのか。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究のリサーチクエスチョンに対する答えを出すために、まず、その準備期間として文献調査および関連計量データ分析を約 2 年間行った(当初の予定ではこの準備期間は 1 年間の予定であったが、実地調査を行うための特別研究期間取得が 1 年間延期されたため、2 年間となった)。その後、平成 26 年 8 月 27 日に調査地域である米国テキサス州に渡航し、ベイラー大学(Baylor University)宗教研究所(Institute for Studies of Religion)を現地研究拠点とした。本研究計画に関して、ベイラー大学の研究倫理委員会(Institutional Review Board)からの承認を得るため、その書類を準備・提出し、9 月下旬にその承認を得た(その後、都合により 10 月 3 日～10 月 23 日まで一時帰国した)。

(2) 調査対象者は、アフリカ系アメリカ人で、且つ、年齢が 30 歳以上、最終学歴が大学卒業以上のキリスト教徒であった。最終学歴を大卒以上とした理由は、中流社会階層(またはそれ以上の階層)に分類される対象者に焦点を置くためであった。厳密な一般化を目的とした計量サーベイ調査ではないため、対象者の選択に無作為抽出法を使用していない。調査対象者は、次の 3 つの方法で獲得した。第一に、地元のアフリカ系キリスト教会の牧師にコンタクトを取り、対象者条件に合う教会員を紹介してもらい、または、牧師の許可の下、研究への参加希望者を教会内で募った。第二に、筆者のパーソナルネットワークから、対象者条件に合致する人を探した。第三に、調査に協力した対象者に、対象者条件に合う知り合いを紹介してもらった。平成 27 年 3 月 31 日までに 27 名(男性 10、女性 17)の対象者とのインタビューを完了した。(なお、現地調査開始が 1 年間延期されたため、平成 27 年 4 月 1 日以降もインタビュー調査を継続し、当初の目標である対象者 50 名とのインタビューを完了して平成 27 年 8 月下旬に帰国予定である。)

(3) 調査対象者に対して、それぞれ 60 分～90 分程度の質的インタビューを実施した。質問の種類をテーマ別に分類すると、愛国心のレベル、自国に対する意識、教会活動やキリスト教的国家観、オバマ大統領の就任、愛国的社会化の過程(家族・学校・教会)、9.11 同時多発テロ事件、イラク戦争、連邦政府に対する意識、社会的属性(年齢・職業等)であ

る。対象者から許可を得て、インタビュー内容を録音し、インタビュー終了後に内容をワープロで打ち出した。分析は、打ち出したトランスクリプトに対して行われた。

(4)対象者の年齢は、30歳代が3名、40歳代が5名、50歳代が5名、60歳代が9名、70歳代が0名、80歳代が2名、年齢回答拒否が3名であった。対象者の出生地は、13名がテキサス州、13名がテキサス以外の州、1名が外国出生であった。最終学歴は、大学卒業が9名、修士号取得が13名、ロースクール卒業が2名、博士号取得が3名である。職業は、有職者が16名、退職者が10名、求職者が1名であった。対象者はすべてキリスト教徒であるが、1人は現在教会に所属していなかった。対象者が所属していた8つの教会の内、7つの教会はアフリカ系教会であり、そこでは教会員がほぼアフリカ系アメリカ人で成り立っていた。残り1つの教会は、様々なエスニシティで混成される教会であった。

#### 4. 研究成果

(1)ここで紹介する研究成果は、平成27年3月31日までにインタビューを実施した対象者27名のデータに基づくものである。質的インタビュー調査の分析結果は、対象者が語った言葉をそのまま引用することによって彼らの見方を明らかにすることが普通であるが、本報告書ではページ数に限りがあるため、引用は行わず、概要を掻い摘んで提示することとする。

(2)各インタビューの最初に、「アメリカに対するあなたの愛は、どのくらい強いですか。極端に強い、とても強い、ある程度強い、あまり強くない、のどれですか」という質問をした。その結果、22名が「極端に強い」または「とても強い」と回答し、5名が「ある程度」と回答した。「あまり強くない」を選択した対象者はいなかった。ここからわかることは、第一に、対象者には、愛国心が強い人（「極端に強い」または「とても強い」と回答した人）が圧倒的に多いということ、第二に、少数であるが愛国心がそれほど強くない人（「ある程度強い」と回答した人）もいるということである。

「ある程度強い」という回答を選んだ対象者に、愛国心があまり強くない理由を尋ねた。その結果、5名の中の4名が、アメリカに存在する人種差別について言及した。具体的には、職場における差別的対応、アフリカ系大統領であるオバマ氏に対する国民の偏見的态度、近年に見られる白人警察官によるアフリカ系アメリカ人殺害事件等が挙げられ、このような人種問題が4名の対象者の愛国心をやや弱めているようであった。

以下では、ページ数に限りがあるため、愛国心が強い対象者22名に焦点を置いて、分析結果を提示する。

愛国心が強い対象者も殆どが何らかの人種差別を受けたことがあると述べていた（そのような体験がないという対象者は3名のみであった）。これらの体験は、軽微なものから深刻なものまであり、また、その時期に関しても子供の頃の体験から最近のものまで様々であった。このような被差別体験にもかかわらず、アメリカを強く愛することができる理由は何なのだろうか。

(3)愛国心が強い対象者がアメリカを愛す理由として、最も言及が多かった(12名)のは、「アメリカで生まれ育ったから」という趣旨の発言であった。この発言の意図するところは、自分のルーツがアメリカにあり、アメリカでの生活が自分のアイデンティティの一部になっていることを示唆しているようであった。その次に言及が多かった(9名)のが、「アメリカには自由がある」という趣旨の発言であった。具体的には、宗教信仰の自由や様々な選択の自由を享受していると認識していた。3番目に多かったのが(7名)、「他国よりもアメリカの方が秀でている」という趣旨の発言であった。海外経験に基づいて発言している人とそうでない人が対象者にはいたが、アメリカに存在している自由のレベルや次に言及する「成功の機会」において他国よりも秀でているという発言である。つまり、アメリカには人種にまつわる問題があるが、他国に住むよりもアメリカの方が良いという視点である。4番目に多かったのが(6名)、「アメリカには成功の機会(opportunity)」があるという趣旨の発言であった。この発言が意味していることは、アメリカには教育の機会、就きたい職業に就く機会などが豊富に存在し、自己実現が可能だということである（以上の回答は、複数回答も含んでいる）。

差別を受けた体験を持っていながらも、愛国心が弱くならない理由は、その体験の認識にもあった。10名の対象者が、差別的行動をとる加害者は、すべてのアメリカ人ではなく、一部の特定の個人であるという趣旨の発言をした。したがって、人種差別を受けた時、加害者である個人に対しては怒りを感じはするが、自国全体に対してその感情を一般化することはほとんどないのである。もう一つの理由は、歴史上の進展と関係がある。現状にはまだ人種差別の問題が確かに存在しているが、歴史の変遷を振り返ると、アメリカの人種問題に劇的な改善がみえてくれるという認識である。つまり、過去のアメリカと比較した時に、現在のアメリカには、より平等な社会が築かれているという認識があり、愛国心が強い22名の対象者の内4名がそのような趣旨の発言をした。

対象者が自国を愛す理由は、アメリカが掲げる理想に対する誇りとも関係がある。そのことが最もはっきりわかる事例が憲法に対する意識であった。愛国心が強い22名の対

象者の内 17 名が、アメリカの憲法を誇りに思っているという趣旨の発言をした。このことが意味していることは、アメリカが掲げている理想は素晴らしいものであり、憲法が規定する権利や自由や政治原則を文字通りに追求する限り、アメリカは常により良い方向に向かうという考え方である。言い換えると、現状には人種差別の問題が未だ存在しているが、アメリカが掲げる理想を追求する限り、そのような問題は次第に解決されていくという望みがある。

(4) 2001 年の同時テロ多発事件とイラク戦争に関する発言からは、興味深い特徴をみることができた。まず、同時多発テロ事件に関しては、この事件の直後に、対象者はアメリカ国民としての一体感を体験し、そこに一種の喜びを感じたという趣旨の発言があった。愛国心が強い 22 名の対象者の内 6 名がそのことを言及した。ここで注目すべきは、この一体感が、人種の壁を忘れさせるアメリカ人としての一体感であるという点である。それは、被差別体験を持つアフリカ系アメリカ人であるからこそ、特に敏感に感じられたものであると推測できる。イラク戦争に関する発言からは、対象者の愛国心は盲目的なものではないことがわかった。愛国心が強い 22 名の内 15 名が自国が遂行したこの戦争に対して批判的意識を抱いていた。

(5) アフリカ系アメリカ人で初の米国大統領の誕生は、多くの対象者の愛国心を高揚させたと言える。22 名の内、21 名がオバマ氏の大統領当選に対して好感を抱いていた。アフリカ系候補の当選が実現可能だとは思っていなかったため、オバマ氏の当選が大きな喜びと驚きであったと 5 名の対象者が発言した。

(6) キリスト教との関連性からは、教会の役割がアフリカ系アメリカ人の愛国心形成に重要なことがわかった。第一に、復員軍人に対して敬意を表す儀式が、本研究の対象者が所属しているすべての教会で、年中行事として行われていた。また、愛国心が強い 22 名の対象者の内の 14 名が、この儀式を教会で行うことが重要であるという趣旨の発言をした。この儀式を行う理由として様々な発言があったが、重要な点は、この儀式を通して、アフリカ系アメリカ人がどれほど国のために犠牲を払っているのか、どれほど愛国的であるのかを確認させる機能を持っていると言えよう。第二は、アフリカ系教会の多くは、教会でアフリカ系アメリカ人の歴史を教えている。この歴史教育を通して、アメリカにおける彼らのルーツがどれほど深く、アメリカ社会への彼らの貢献がどれほどあり、どれだけの人種差別の困難を乗り越えてきたかを教会員に理解・確認させるものである。この歴史教育によってアメリカと自身の関連

性を確認し、自国に対する愛国心を間接的に育んでいると言えよう。

また、愛国心が強い対象者 22 名のすべてが、自国のために祈りを捧げていると述べていた。その内の 18 名は、神の導きがアメリカの指導者に与えられることを祈願していた。このような国に対する祈りは、愛国心が内面化されている結果であるとともに、アメリカが掲げる理想が完全に実現されることを強く望んでいる結果だと推測される。

(7) 本研究の現地調査は現在も進行中であるため、成果のインパクトをこの時点で測りすることはできない。しかし、この分野の研究は米国でもほとんど行われていないため、アフリカ系アメリカ人研究の発展に本研究が寄与できると推測される。

今後の展望として、本研究の成果を他のマイノリティの研究に応用していくことが、今後の研究発展につながるであろう。

最後に、筆者の現地研究拠点となったベイラー大学 (Baylor University) 宗教研究所 (Institute for Studies of Religion) の研究支援に深く感謝申し上げたい。

#### <参考文献>

石生義人, 2011, 『アメリカ人と愛国心：白人キリスト教徒の愛国心形成に関する社会学的研究』彩流社.

Ishio, Yoshito. 2010. "Social Bases of American Patriotism: Examining Effects of Dominant Social Statuses and Socialization." *Current Sociology* 58(1): 67-93.

Shelton, Jason E. and Michael O. Emerson. 2012. *Blacks and Whites in Christian America*. New York: New York University Press.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

石生義人, 「オバマ大統領の外国生まれ俗説を信じるアメリカ人とその決定要因: 2012 年全米サーベイデータの分析」, 2014 年度日本選挙学会 総会・研究会, 2014 年 5 月 17 日, 早稲田大学(東京都新宿区).

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

6 . 研究組織

(1)研究代表者

石生 義人 (ISHIO, Yoshito)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：60282331